日本産業衛生学会
関東地方会ニュース
(題字 高田　勗 筆)

発行所／日本産業衛生学会関東地方会事務局・〒105-8461 東京都港区西新橋 3-25-8
東京慈恵会医科大学環境保健医学講座内・TEL(03)3433-1111 内 2266・FAX(03)5472-7526・発行責任者／清水　英佑

座談会風景（左より三好祐司関東産業医部会長、清水英佑地方会長、
神保恵子関東産業看護部会長、伊藤昭好関東産業衛生技術部会長）

―座談会に寄せて―

情報化時代における地方会ニュース

日本産業衛生学会関東地方会　会長　清水英佑
（東京慈恵会医科大学環境保健医学講座）

経済の低迷と成長鈍化のグローバル化により、雇用情勢は一段と厳しさを増している最中に、イラク戦争やSARS 新型肺炎の流行がおこり、様々な形で追い打ちをかけるように日本経済に打撃を与えている。特に、航空会社や旅行代理店の影響は大きいと報じられている。各企業における産業医、産業看護職を初めとして保健医療関係者にとって、SARS 対策は座視できない問題である。情報の不正確さ、治療法や予防法の曖昧さは、一般国民は当然としても、医療関係者も混乱しており、ましてや企業の保健医療および安全衛生関係者は正確な情報の入手と対策に追われているのが現状である。これからも日本におけるSARS の発生如何によっては、大きな混乱が予測される。

「関東地方会ニュース」が発刊されて満３年を経過した。インターネットの時代にあって紙媒体とはいえ年２回の発行のために、編集委員のご苦労が伝わってくる。3000 人を擁する関東地方会の会員全員に届けられているが、会員がどのように受け止めているかを知ることは、今後の発行に大いに役立つことである。「地方会ニュース」が会員の声を反映できるように、情報の発信と信頼を獲得できるような存在となれば、地方会発展の礎となる事を確信したい。

— 座 談 会 —

会員のための地方会ニュースに３部会として求めること

〈出席者〉 清水英佑（東京慈恵会医科大学環境保健医学講座）
三好祐司（明治生命健康保険組合東京診療所）
伊藤昭好（労働科学研究所）
神保恵子（NTT 首都圏健康管理センタ保健支援部）

地方会ニュースの存在について

清水　本日は関東地方会ニュースの座談会にお集まりいただきましてありがとうございます。

“十年一昔”と言われますけれども、最近の世の中、特にこのIT化時代にありましては、“三年一昔”と言えるほど社会のテンポが早く進んでいるように感じます。

『関東地方会ニュース』は、2000年の３月に創刊号が刊行されて満３年を過ぎ、７号がすでに刊行されております。

８号の刊行にあたり、「会員のための地方会ニュースに３部会として求めること」というテーマで、関東産業医部会、関東産業看護部会、関東産業衛生技術部会の各部会長さんにお集まりいただきまして座談会形式で行うことが編集委員会で決まりました。それで今日お集まりいただいたわけです。

最初に、各部会長さんの立場から、これまで刊行されてきた７号までの地方会ニュースの存在についてどのように受け止めてこられたかを簡単にお話しください。

三好　産業衛生学会としては学会誌が学会の活動を知る基本になることは当然だろうと思いますが、学術的発表が中心になります。地方会ニュースは産業医なり、産業保健スタッフによる独自の活動を取り上げて、その活動が分かるようなものであればいいと思います。

読んで面白い、生き生きとしたものであることが理想ですが、活動記録が基本ですので難しいでしょうか。これまでの産業医活動の紹介記事など、興味を持って読みましたし、全体として意味あるものと思いますが、もっとアクティブなものであればいいなと思います。

神保　身近な活動状況を知る意味では、例会報告でそれぞれの内容を知ることができ、現在どのようなことが学会として重視されて研修が行われているかを把握するニュースソースとして活用できると思っています。

それと、これからの地方会ニュースのあり方を考える上で注目しているのは「実践活動報告」です。各企業において産業保健活動がどのように展開されているのか、その辺りのことが大企業にとどまらず、中小企業も対象に広がっていくと、さらに情報の交流の場になるのではないかという感想を持って読んでおります。

伊藤　ニュースという印刷された媒体であるということ、そして年２回に限られていることから考えると、記録という位置づけになると思います。

限られた紙面の中に情報をどういう形で残していくかは、情報の入口としての記録をきちんと残しておくという役割はあると思います。

産業衛生技術部会としては、部会員の拡大をはかる目的がありますので、この中の記事を見て、「それでは技術部会に参加してみようか」という気にさせる記事が技術部会から提供できればいいとは考えていますが、残念ながらまだそこまで到達していません。他の部会と比べると、技術部会の場合は単一の職種ではない集まりでもあり、まず個々の活動を報告していくような形で、試行錯誤を繰り返すのだとは思っています。

やはり送られてきたニュースは、一応は目を通すということになりますから、開けてみたら、「こんなことをやっているのか」ということが書かれていて、それじゃあ少し参加してみようか、あるいは、例えばホームページがあるのでアクセスしてみようかというような入口として位置づけられればよいとは考えています。

地方会ニュースに求められる内容

清水　紙媒体でしかも年に２回しか出ていないということで、情報源としては非常に限られていると思います。その中身については７号まで出てきた中で、それぞれの立場から内容的にどういうようなものをもっと求めたいかをお伺いしたいのですが。

三好　今、神保先生がおっしゃられたように、他の企業がどのようなことをやっているかというのは非常に興味があることです。今までにもいろいろな企画があって、企業ごとの特徴ある活動報告がなされているわけです。本当にいい記事を取り上げるには、どこでど

ういう活動が行われているかということを、編集者・地方会幹事が、学会の発表とか、日常のいろいろなコミュニケーションを通じて情報を得ておかなければ、いいものを紹介できないんじゃないかという気がします。

清水　今まで７回の発行の中では、ある程度項目が毎回同じような形で報告されています。もっと実際の企業、中小零細も含めての情報をこの中に盛り込んで欲しいというようなご意見なのかもしれないのですが、その辺はいかがなのでしょうか。

神保　その背景として関東地方会内の看護職のネットワークづくりを進めたい事情があります。現在の産業看護部会の状況をお話ししますと、産業衛生学会の産業看護部会の会員数は今年の１月で700名であり、産業衛生学会に産業看護職として登録されているうちの90%以上が看護部会に組織化はされています。看護部会のうち関東産業看護部会会員数はこのところ270名前後で推移しています。会員数の割合でいくと40%近くを占めていますが、関東で開催される例会やその他の研修会への参加状況をみますと、その一部しか参加していないという印象を持っています。そのような状況ですので、まず関東産業看護部会内でのネットワークづくりが課題と考えています。一人職場や、産業医も非常勤という職場で頑張っている看護職を含めてうまく組織化し、連帯することで支えあえると良いと考えています。その方法を模索中ですが、学会誌にはできない役割として地方会ニュースが情報交換の場になれる可能性はあるかと思います。

清水　具体的にはどのようなテーマや、執筆者を望みますか。

神保　今のところ、産業医の先生方が書いていらっしゃることが多いですね。それなら産業看護職が「じゃあ書くか」というと、すぐに実現できるかはわかりませんが、企業の紹介にしても産業医の視点からだけでなく、看護職の立場からの活動紹介などもされると、看護職にとっては魅力が増す紙面になると思います。

清水　実際にはいろいろと経験を積んでいる方はたくさんいらっしゃると思うんです。そういうものが紙面に反映されるような形が望ましいわけです。

神保　そう思います。

清水　その点、技術部会の場合には、作業環境測定から始まっていろんな職種の人たちがいると思うんです。そういう人たちの意見を地方会ニュースに反映させるにはどうしたらいいのでしょうか。

伊藤　非常に難しいですね。やはりまだまだ出来ていないのですけれども、具体的な実践活動をどうプレゼンテーションしていくかだと思います。ただ、産業保健の現場では産業保健技術職じゃなくて、現実的にはチームでやっているわけです。例えば産業医の方と、あるいは産業看護職の方とどういうような連携をとりながら出来たのか。作業環境測定士ということになると、どうしても測って終わりがちなのです。私自身は測定士の指定講習を担当して感じていることですが、どうしても測定士は決められたことをやって報告して、それも基本的には企業外の人間である場合が圧倒的に多いわけですね。測定機関として企業に関与しているということになります。だから半日行って測定して報告書を書いて終わりというような形になってしまいますので、そこの産業医の先生、産業看護職の方との触れ合いが非常に少なくなってきているのが現状だろうと思います。だから、測定士に限って言えば、測ったデータがその企業の産業保健活動の中でどう生かされていくのかというのがなかなか分からない。半年たって、「この間のことはこうでしたよ」というような形で聞かされることがあるのかもしれません。その意味で、他の職種との連携というのがこれからの大きな課題だと私は思っています。そういうものもニュースの紙面を通じていろいろ出来るといいかなという希望はあります。

３部会の連携

三好祐司（関東産業医部会長）

三好　連携ということは非常に重要なことだと思います。この地方会ニュース創刊号の中で、前産業医部会長の高田和美先生が、「産業保健というのは、同じ目的を持ってチームワークを組んで共同作業をいかにやっていくかということが重要だ」ということを書いていらっしゃったわけです。

その頃は技術部会誕生の１年位前でしたので、連携は医部会と看護部会が念頭にあったと思いますが、両部会はわりと連携も密接であったのではないかと思います。

その一つの例は、産業医・産業看護全国協議会です。医部会と看護部会が一緒に力を合わせてやっていくことで、連携と情報交換ができ、一緒に仕事をやるチームを作っていくために非常に役に立っていたように思

います。

技術部会との連携をどのようにやっていくのかは、これから検討していくべきことです。

伊藤　医部会と看護部会が連携しやすかったという点は、多分、健康診断や健康管理という面での日常的な接点があったためだと思います。技術部会の場合は作業環境管理、あるいは職場の改善から、働いている方の健康をどうしていくかという考え方になっていきますので、そういった場面での他部会との連携がまだこれからだとは思います。

清水　部会同士の連携というのは確かに非常に重要で、これは全国規模でも同じです。

ただ、地方会ニュースの場でどういうふうに連携をしているかとか、そういう情報を流すという意味では地方会ニュースがどういう位置づけに出来るかです。

神保　連携を紙面の中でどのように表していくかというとなかなか難しいかもしれないですけど。例えば「実践活動報告」で言えば、今までのものは、内容は各執筆者に任されていますが、産業保健スタッフ各々どのような役割を担って連携しているかを具体的に盛り込むとか、どのような考え方のもとでどのような業務を優先して実践しているか、それぞれの役割における課題は何かなど、ある程度の構成を決めておくと、その企業での産業保健スタッフの連携が生き生きと見えてくるかもしれません。

三好　連携情報を流すにしても、たとえば、東海のですけれども、関東地方会ニュースと同じぐらいのページ数を持っているわけです。関東より会員数の少ない地方会ですので、地方会員の中で掲載される割合は高くなって、いろいろな活動がすぐ発表できるチャンスを与えられるというような気がするんです。会員数に合わせてニュースをもっと立派なものにしろというわけにもいかないと思います。

清水　そうですね、今の予算規模ですと年に２回ということになっているわけですが、なるべく大勢の人たちがこの地方会ニュースの執筆に協力をしていただける、あるいはそういう掘り起こしをしていくということは大事だと思うんです。

技術部会の場合にはいろんな方たちがいらっしゃるにもかかわらず、今まであまりそういう観点からは執筆をいただいていないと思います。

伊藤　そうですね。研修会の実施報告に終わっていますね。実践活動の報告ということがこれからは本当に必要だと思います。それもいろいろな職種にわたってだと思います。

清水　３つの部会の中では看護部会は研究会としての歴史が長いわけです。今後、長い歴史を踏まえて、看護部会としてどういうような形でこの執筆にご参加いただけるかと思うのですが。さきほどのいろんな実践についている方たちの情報をこの中に盛り込んで欲しいということなのでしょうか。

神保　まだ、具体的に地方会ニュースに参加していこうかというところまでは、検討していない状況ですが・・・。看護部会の歴史ということでは、看護部会の前身の看護研究会は第７号にも掲載されていますように、1978 年から活動が始まっています。年に 1～3 回のペースで研修会を開催してきました。改めて見ますと、良く続いたものと感心いたします。ここ数年は年１回の開催になっておりますが、参加人数が伸び悩んでいるんですね。過去の研修会では多いときで 300 名位のこともあったのですが、最近は 50 名弱のことが多くなっています。原因について話し合っているのですが、他の研修会の機会が増えていることや、果たして魅力的なテーマで開催されているかなどの問題もあると思います。それと、以前に比べて時間内に社外研修に参加することができにくくなっている状況があるのではないかとも考えています。そういう背景もありまして、先ほどもお話ししましたように普段このような活動に参加することの少ない看護職といかに連携していくかが課題になっています。そういう意味で、地方会ニュースが情報交換の場になるのではないかという気がしております。

会員の声を反映させるためには

清水　この関東地方会には約 3000 人近く会員がおり、全員にこの地方会ニュースを送っています。実際、これをお読みになった感想といったようなものは何かお聞きになっていますか。技術部会の立場からはなにかそういう声は聞こえてきますか。

伊藤　まだまだ紙面にそれほど登場していないこともあって、なかなかニュースに対する反応というのは聞こえてこないです。

清水　毎号巻頭言のような形で１面にはそれぞれあるテーマで書いていただいているわけですが、産業医部会はどうでしょうか。こういうものを読んで何か特に注文が出たとかはございますか。

三好　産業医部会でもやはり読んだ感想をお互いに話し合うという機会は今までありませんでした。

産業医部会としては、関東産業医部会レベルではな

く、全国の産業医部会としてのニュースが年に２回または３回出ていますが、やはりどれだけ楽しく、興味を持って読まれるようにするかということではいつも悩んでおりまして、難しい問題だと思います。

清水　看護部会のほうでは何かありますか。

神保　地方会ニュースに対しての感想というのは特別に聞いていないんです。ただ、地方会の活動の情報源とはなっていると思うんですけれども。

清水　７回の中ですとどの辺が一番情報源として役に立っているんでしょうか。

三好　産業保健実践活動は興味深いと思います。ただ、年に２回の発行ですと、フレッシュな記事をなかなか載せていけない。今申し込めばちょうど間に合うような企画を紹介することがなかなかできないのじゃないかと思うんです。

例えば、産業医・産業看護全国協議会のように、年に１回で日程的にもかなり前から準備されているものなら掲載できますが、例えば産業医研修会のように2、3ヵ月単位で企画が出来て実行されるようなものはこのニュースでは対応しきれないわけです。

清水　そうですね、会員の声を反映させる方法として、どういう手段を講じたら一番いいのか、編集委員会としても誰に書いてもらおうか、ということで非常に悩むわけです。

どうでしょう、技術部会は、今まであまり執筆がされていないですけれども、会員の声を反映させるためには、どのような手段を講じたらいいか、何かご意見ございますか。

伊藤昭好
（関東産業衛生技術部会長）

伊藤　なかなか難しいことだと思います。実は技術部会では、メーリングリストを作っているので、日常的には情報発信することが出来ますし、議論もされることもあるのですが、それ自体の活用がまだまだというレベルですので、“いわんやニュースをや”という感じになるでしょう。ですから、皆さんがもっと積極的に発言する、そのためには、やはり発言するテーマのようなものが必要と思いますが、その発掘が必要だと思いますが・・・。

例えばメーリングリスト上で議論が煮詰まってきて、「これは面白い」というものをニュースに挙げて、さらに広く議論を広げていくというようなこともできるのではとは思いますが・・・。それはまだまだ理想論ですし、部会内の議論をどうくみ上げていくのかが課題です。研修会などを繰り返す中で少しずつ議論を組み立てていかないと、このニュースまで持ってくるのはなかなか大変だと思います。ですからそのニュースに対して意見を反映させるというようにするためには、会員にその気にさせる議論をどのように作り上げていくかということが今の課題ではないかと思っています。

清水　学会誌は年に６回出ているので講座的なものでもそれほど間があいていないと思うのですが、地方会ニュースは年２回しか出ないので、連続的な講座形式は非常に難しいわけです。だから、どうしても毎回で完結するような形で何かしていかないと難しいとは思うのです。さきほど地方会員が3000人いて、ページ数が12ページというと、それに割り当てられる会員のチャンスというのは少ないということでした。例えば、看護部会のほうから何か皆さんに有用で役に立つ内容のものを書いていただくということになるかと思います。そうでないと、魅力ある地方会ニュースにならず、なかなか読んでもらえないと思いますが、その辺はいかがでしょうか。

神保　今、伊藤先生がおっしゃったように、何に魅力があるかという所の意見をどのように吸い上げるかという課題は看護部会も同じです。また、研修会のあり方についても模索中なのも同様です。幹事会の際に少人数の勉強会をセットし、それがもう少し広がっていくと考えて開催する予定もあります。そこでは統計処理をシリーズでやってみようかと言うことになっていますが、そういう内容を本紙に反映するのは、清水先生がおっしゃっていたように難しいでしょう。

部会ページの創設は？

清水　例えば３ページは、今回は医部会、次は看護部会、その次は技術部会というような形で任せた場合に、魅力あるニュースに出来るかどうかですね、これは思いつきですけれど。(笑)

三好　今、技術部会の存在は知られているけれども、どういう部会なのだろうと医部会のメンバー、あるいは看護部会でも思っているんではないでしょうか。

ですから、できるだけ早い機会に、技術部会をわかりやすく紹介するというような企画を作られてもいいんじゃないでしょうか。

伊藤　技術部会に何ページかいただいて宣伝をして、部会員を獲得できるような場を提供していただけると

いうのは非常に有難いです。

ただ、今、三好先生がおっしゃられたのですけれども、実は技術部会の中でも、「自分たちはいったい何をするのか」というようなところがありますね。

産業医や産業看護職に比べて、われわれは少し混沌としていることは確かです。当初、部会を立ち上げた時は日本版インダストリアル・ハイジニストを目指そうと言っていたのですが、どうもここへきてトーンが落ちてきていているのが実際のところです。

それでは何を学んでいけばいいのか。だから今は、「多くの人に多くの意見を聞く時かな」であって、「これで行きましょう！」というのが実はないのが正直なところで。(笑)

三好　例えば人間工学は技術部会の中で他から理解し易い項目の一つじゃないかなと思います。

また、産業医は医学あるいは健康管理から産業衛生の仕事に入っているので、人間工学というのは知識としても、ちょっと苦手の分野じゃないかなと思うんです。

実は今年の12月に、全国レベルでの医部会と技術部会の共催で、職場の人間工学的な診断をつける能力を養うというような共同の企画が検討されているようです。技術部会とも少し連携が始まっているのかなと思いました。産業医にとって非常に刺激になるだろうと思いますので、何か分かり易い形でアピールしていただくとお互いにいいんじゃないかと思うんです。

伊藤　はい。今秋に、技術部会の全国大会が名古屋で開かれるので、そこで“職場改善”ということに重点を置いて話し合いをすることにしています。

“職場改善”については、人間工学的な改善が、効果も大きいし比較的ローコストで出来るといった点で、非常に重要だと思います。それも職場に出かけてチェックリストを使いながら考えていくといいです。これはぜひ産業医の先生方にも職場巡視の時にやっていただけるといいのかなと考えていますし、そのためのツールを技術部会でも提供できればよいと思っています。

神保恵子
(関東産業看護部会長)

神保　今の三好先生のお話に同感です。ほんとうに人間工学的なところは弱くて、研修の機会が欲しいです。今、看護部会では継続教育ということで研修会の内容を単位申請しているのですが、人間工学的な部分が学べる研修会が少なくて、たまに開催されると人気があります。そのような専門的な話しには皆関心が強いと思います。

それと、第1回産業衛生技術部会研修会の資料を見ましたが、幹事会でも話題になりました。まだ議論が整理されていなくとも、部会が何を目指しているのかを、それこそ座談会形式でも良いのではないかと思います。

伊藤　そうですね、現場の人たちが日常的にどういう活動をしながら何を苦労しておられるのか。そして部会で「自分としては、いま何をしたいのか」といったことを、比較的自由に書いていただくようなスペースを提供していただければ、それを技術部会で編集して、うまい形で部会の活動を宣伝できればと思います。

それを3部会で順番にページが与えられれば、研修報告だけではなく使えるのではと考えます。

神保　それぞれの持っている専門性のところでお互いに連携しているところとか、どこで連携しているのかということ自体が分からないところがありますから、それぞれの専門性をPRする紙面づくりでもいいのかなと思います。

三好　部会のページを与えていただけるというのもいいことじゃないかと思うんです。

実は、産業医部会でも、会員数が少ないということが問題になっております。現在、7000人の産業衛生学会員のうち、3900人以上が医師ですが、医部会員の数は500人なのです。部会の目標として800人に増やそうとか、あるいは800人に増やせる魅力あるものにしなければいけないとか、あるいは部会の活動がさらに認められれば、産業衛生学会員の産業医は自動的に産業医部会に入るようにするとか、議論になったことがあるのですけれども、地方会ニュースが部会員を増やすことに少しプラスになるのじゃないかという、ちょっと部会からの期待もございます。(笑)

神保　いざやるとなるときっと大変だろうなとは思うんです。(笑) でも確かにPRの場にはなります。

清水　いわゆる産業看護職は実際に現場や企業で働いている方がたくさんいると思うんです。その方達が全員学会に入ってこない、かなり埋もれていると思うんです。そういう人たちには、この地方会ニュースは当然届いていないわけです。だからその辺の発掘の必要もあると思うのです。

神保　そうですね。なるべく産保センター発行のニュース等に研修会がある時には載せたりとか、ちょっといろいろ手探りではやっているのですけれども・・・。

伊藤　確かに部会にページをいただける、そして、部会がそのページに関してはイニシアティブをもって編集をさせていただけると、今の技術部会にとって会員拡大というのが一番の課題ですので、それに活用させていただけるなと感じます。大変なことは大変なんですけど、多分それをやらないと会員は増えないと思います。学会誌ではそれが出来ませんので、こういうニュースで具体的に出来ると非常にやりやすいと思います。

学会誌では連続講座みたいなことをやっていますが、どうしても固くなる。とっつきはそんなによくないと思いますね。でも実践活動の報告の中でうまくプレゼンテーションできれば、「あぁそれじゃあ部会に入ってやってみようか」という方が出てこないとも限らない。そういうことを期待したいと考えます。

魅力ある地方会ニュース

清水英佑　（関東地方会長）

清水　今までのお三方の話を伺っていますと、魅力ある地方会ニュースにするには、なるべく大勢の方たちがこれに実際に携わると言いますか、執筆をするとかいう形に持っていく。そのためには、“請負制”と言いますか、それぞれの部会に何ページかを与えていく。そこでそれぞれの部会が責任を持ってそのページの執筆者を募り、あるテーマで何かを書くような形にすればもう少し大勢の人たちが参加できるのではないかということだと思うんです。

他に何かもうちょっと、魅力ある紙面にするのにいい方法はありますでしょうか。

三好　表現力豊かで面白い記事もいいのですが、そうでなくても、産業保健スタッフとしての関心事、あるいは重要だと思っていることがきちんと書かれているというようなものが基本になると思います。そのようなテーマを選んでいけるということが重要じゃないかなと思います。

それから、さきほど「産業保健というのはいろいろなスタッフの共同作業だ」というお話をいたしました。したがって、協調とか連携が必要ですが、それだけではなく、やはり職種の専門性や、実際の仕事の中では役割分担がありますので、それぞれの部会が専門性をきっちりとアピールするということも、重要なことだと思います。それが結局は他の部会にとっても役に立つのじゃないでしょうか。

神保　画期的な紙面作りっていうのはなかなか出ては来ないのですけれども、さきほどから出ているようなそれぞれの専門性を生かした報告があったりするのは良いと思います。テーマがはっきりしていれば、それについて多少固い紙面になっても得るものは多いのじゃないかとは思います。それと研修会報告も年に２回なので、遅れることは遅れるんですけれども、どうしても足が遠のいていたりいろいろな事情であまり参加していない時に、「あぁ、こういう形で今重要なテーマが取り上げられていてやっているんだな」ということでは、報告ものの意味があるかなとは思っているんです。なるべく中身を簡略に伝えるような形で紙面を組んでくださっているので、とても良いかなと思っていますけど・・・。

伊藤　神保先生が言われた報告ですが、報告というのはこのニュースには必要ですし重要だと思いますが、限られた紙面でその報告をどのようにうまく活用するかということなのです。「こういうことをやりました」ということと、そこに例えば技術部会もホームページを持っていますから、「そのホームページのここにアクセスしていただいたら、その時のレジュメがダウンロードできますよ」とか、その手の情報が掲載されていると、あとからその情報を迎えに行くことができます。そういった情報の入口としてこのニュースを使えたらいいと思いますね。研修資料などは全部載せられないので、興味を持った方は入っていくキーがそこに載っているというような形で使えればとは思います。

三好　あまり発展しすぎても困るかもしれませんけれども、関東地方会でホームページを持つとか、そういったような方はいかがなのでしょうか。(笑)

清水　それぞれお三方にいろいろと注文を出していただきましたが、これからこの地方会ニュースをより充実したものにするためにご意見を今後反映させていきたいと思います。

今日はどうもありがとうございました。

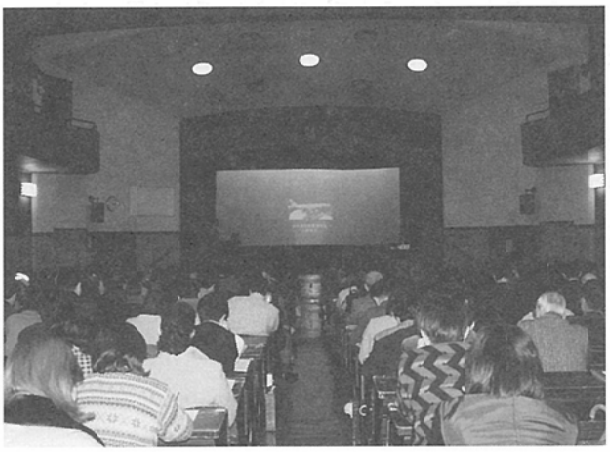
（本座談会は2003年5月19日に東京慈恵会医科大学中央棟会議室にて行った。）

第219回例会報告

加地正伸（日本航空）

第219回例会は、2002年12月7日（土）13：00から東京慈恵会医科大学中央講堂（東京都港区）にて東京都医師会共催のもと開催され17：15に終了した。当日は雨天の寒い一日であったが会員213名、非会員105名、計318名（内日医認定産業医講習会参加者269名）の参加者を得て盛会となった。

本例会では地方会長の挨拶に続き特別講演・教育講演の4題の講演を行った。その内容は従来と多少趣を異にした企画を試み、教育講演①「VDT職場の健康管理 ― VDT作業における労働衛生管理のためのガイドラインを中心に ―」（演者・野田一雄（労働衛生コンサルタント）、司会・松崎一葉）、特別講演①「海外勤務者のマラリア予防対策」（演者・大友弘士（東京慈恵会）、司会・清水英佑）、特別講演②「産業医学と航空医学のかかわり」（演者・飛鳥田一朗（日本航空）、司会・津久井一平）、教育講演②「海外出張者の健康管理 ― 航空機内での健康管理について―」（演者・大越裕文（日本航空）、司会・福本正勝）であった。なお、本会には日本航空㈱、㈱JALウェイズの協賛をいただいた。



第220回例会報告

中尾睦宏（帝京大医）

第220回例会は、2003年1月25日（土）山之内製薬本社ビルにて開催された（主管：帝京大学医学部衛生学公衆衛生学講座）。参加者は202人（会員177人、非会員25人）で、「Evidence Based Medicine（EBM）による健康診断」をテーマとした学術講演が午後1時から催された。まず清水英佑地方会長から開会のご挨拶があり、引き続いて4つの講演が行われた。内容は以下のとおりである。①EBMによる健康診断（矢野栄二、帝京大学医学部衛生学公衆衛生学教授）、②職域における結核の現状と結核検診（上田隆、大田区大田北地域行政センター課長）、③職域におけるうつのスクリーニングとストレスマネージメント（中尾睦宏、帝京大学医学部衛生学公衆衛生学講師）、④健康診断の医療経済評価（小林廉毅、東京大学大学院医学系研究科公衆衛生学分野教授）。まず矢野先生からは、健康診断の有効性と有用性について、EBMの見地から総論的な解説がなされた。次に上田先生からは、EBM健康診断の各論として、結核の現状と結核健診に関する最新の知見が発表された。中尾からは、各論の２番目として、今話題の「うつ」のスクリーニングについて発表された。最後に小林先生からは、健康診断の医療経済的な側面について解説がなされた。例会は午後5時15分に閉会したが、当日参加者も多く盛況であった。①と③の発表については、帝京大学EBMセンターのホームページから、講演模様を動画配信しているので是非参照して頂きたい。また2003年4月15日に「EBMの健康診断（第2版）」（矢野栄二ら編、医学書院）が刊行された。本講演内容も網羅されているので、ご一読頂けたら幸いである。

(http://www.med.teikyo-u.ac.jp/~ebm/sanei220/index.htm)

第221回例会報告

今井常彦（東邦大医）

第221回例会は、2003年5月10日（土）大田区民ホールアプリコにて開催された。拡大幹事会・平成15年度総会後、本会は、会員150名、非会員82名の参加を得て、13時30分から開始された。地方会長の挨拶に続き、一般演題4題が発表された。シンポジウム「よりよい産業保健実践のために」は、高田洋孝先生（キヤノン）、内山寛子先生（JR東日本）は業種の異なる事業所における特殊性に関連して産業医の立場から、近藤充輔先生（JFEスチール千葉協力会）は労働衛生管理の立場から、それぞれ効果的に工夫し実践されている内容が示された。特別講演は「屋内環境中の気相化学物質微量汚染」を大道正義先生（千葉市環境保健研究所）は多数の事例を基に興味深い講演をされた。教育講演は「若年労働者の肝臓病とその予防」について杉本元信先生（東邦大学医学部総合診療科）はNASH等最新のトピックスを含め、現代の若年層に多くを占める肝臓病の特徴について詳細に平易に解説された。参加者から各テーマについて活発な質疑がなされ盛会のうち19時に閉会した。

関東産業衛生技術部会
第２回及び第３回研修会報告

伊藤昭好（労働科学研究所）

2003年3月8日(土)13:30〜16:30に、19名の参加で関東産業衛生技術部会の第2回研修会を早稲田大学理工学部57号館201号教室で開催した。メインテーマは「産業保健専門職の向上教育の現状と課題」として産業医の立場から大竹厚裕先生（沖電気カスタマアドテック健康推進室）に、産業看護職の立場から大神あゆみ先生（読売新聞東京本社労務部健康ケアルーム）に、作業環境測定士の立場から外山尚紀先生（東京労働安全衛生センター）に、それぞれ自身の経験をふまえて各職種の向上教育の紹介とニーズを報告していただき、活発に討議した。また、本研修会は産業看護職継続教育実力アップコースとして認められ、産業看護部会からも参加をえた。

また第3回研修会は、5月23日（金）18:00〜20:00に、参加者25名で慶應大学医学部新教育棟4階講堂3にて、産業衛生技術部会・教育研修会と共催した。演者の大前和幸慶應大教授は、学会の「許容濃度等に関する委員会」の委員長でもあり、許容濃度の決まり方の内幕も含めてざっくばらんに話していただいた。

なお第2回研修会の資料や、第3回研修会の詳細な報告は下記のホームページに掲載されているので参考にされたい。今後の研修会は7月と来年2月に開催する予定である。

(http://www.isl.or.jp/JSOHtech/index.html)

関東産業医部会・関東地方会産業医研修会報告

三好裕司（明治生命）

2003年5月25日（日）慶應義塾大学北里講堂にて関東産業医部会ならびに関東地方会・東京都医師会主催で日本医師会認定産業医研修会を実施しました。

テーマは過重労働による健康生涯と法律問題（加藤労働衛生コンサルタント事務所長：加藤雅治）、職場のメンタルヘルスー職業性ストレス簡易調査表についてー（東京医科大学公衆衛生学教室教授：下光輝一）、肝障害の健康管理（三井記念病院副院長：田川一海）、作業環境管理と作業管理（十文字学園女子大学人間生活学部教授：田中茂）で、単位内訳は実地２単位と基礎・後期３単位、または生涯・更新１単位、専門２単位でした。過重労働・メンタルヘルスは産業衛生のホットな部分で、肝障害の健康管理はEBMと臨床医学の両面から健康管理に迫るもので、いずれも好評でした。

また、実地研修の設営は、６部屋に及ぶ教室の準備、田中先生のもと８名の指導者にお世話いただくなど、苦労しましたが、実地研修ならではの具体的な理解ができ、面白かったとの評価もいただきました。

今回、更新・実地の単位を含んでいたためか、定員300名に対し、北は北海道から南は九州まで全国から応募があり、案内を出して2、3週間で満員になりました。関東産業医部会として、今後も年１回のペースで産業医研修会を開催して参ります。可能な限り、実地研修を取り入れるつもりですので、よろしくお願いします。

理事会報告より

清水英佑（慈恵医大）

日時：2003年2月1日および5月24日

1. 常設委員会として倫理審査委員会の設置が山口の総会で決定した。今後理事長名で「産業保健研究倫理ガイダンス」、「日本産業衛生学会倫理審査委員会規定」、「倫理委員会の運営に関する細則」を機関誌に掲載する。また、倫理情報システム委員会についても検討する。
2. IT化小委員会からの報告：学会の会員情報、Web製作、サポート業務、HP等につき外部機関と契約する方向で検討に入った。
3. 定款改正による今後の手続きについて９月を目途に所轄官庁と交渉を進め、来年の総会で新定款に基づき代議員および新理事を選出することにした。
4. 第78回日本産業衛生学会は関東地方会（清水英佑企画運営委員長）に依頼された。
5. 表彰制度各選考委員が委嘱された。
   功労賞および名誉会員選考委員：中明賢二、竹内康浩、植本寿満枝
   学会賞選考委員：小木和孝、角田文男、二塚信、河野啓子、斎藤和雄
   奨励賞選考委員：実成文彦、伊規須英輝、藤田雄三、佐藤章夫、日下幸則
6. 産業疫学研究会の設立が承認された。
7. 作業環境測定協議会（田中勇武委員長）の設置が総会で認められ今後2年間で結論を出すことになった。
8. 労働衛生関連法制度検討委員に看護職からの代表として富士電機の五十嵐千代氏が推薦された。
9. 正会員7062人（5月15日現在）との報告があった。

第222回関東地方会例会（一泊例会）・第47回見学会のお知らせ

日　　時：2003年9月19日（金）～20日（土）
例会会場：つくば国際会議場（エポカルつくば）
見 学 会：宇宙開発事業団筑波宇宙センター
企画運営委員長：佐藤　怜（茨城県医師会長）
当番幹事：松崎一葉（筑波大学・社会医学系環境保健）

幹事会報告より

鈴木勇司（慈恵医大）

2003年1月25日および5月10日

1. 川田智之幹事、森晃爾幹事、横山和仁幹事の辞任および井上和男氏（東大）、小山洋氏（群大）、鈴木英孝氏（エクソンモービル）の幹事就任が承認された。
2. 第78回日本産業衛生学会を関東地方会で開催することが承認された。企画運営委員長は清水英佑関東地方会長が就任する。
3. 関東地方会3部会名称を、関東産業医部会、関東産業看護部会、関東産業衛生技術部会とする。
4. 例会参加費を会員は1,000円、非会員は4,000円とする（平成16年度より実施）。
5. 第222回一泊例会・第47回見学会（当番幹事、松崎一葉）は2003年9月19日（金）・20日（土）につくば国際会議場エポカルおよび宇宙開発事業団筑波宇宙センターにて開催。
6. 第223回例会（当番幹事、三好裕司）は、2003年12月の土曜日に行う。
7. 第224回例会（当番幹事、伊藤昭好）は、2004年1月または2月の土曜日に行う。
8. 第3回関東産業看護部会産業保健研修会は、2003年11月頃開催予定。
9. 関東産業衛生技術部会は、産業衛生技術職に必要な知識・技術についての研修会を年間3回程度開催予定。
10. 関東地方会ニュース9号は、2004年1月発刊予定。

平成15年度総会

鈴木勇司（慈恵医大）

1. 議長に杉田稔教授（東邦大医）が選出された。
2. 平成14年度事業報告・決算報告が承認された。
3. 平成15年度事業計画（案）・予算（案）が承認された。
4. 第78回日本産業衛生学会は、関東地方会で開催することが承認された（清水英佑　企画運営委員長）。
5. 例会参加費を平成16年度より、会員は1,000円、非会員は4,000円とすることが承認された。

通達・行政ニュース

市川正明（中災防）

第10次の労働災害防止計画策定される

このほど、厚生労働省より労働災害防止のための主要対策が盛り込まれた第10次労働災害防止計画（平成15年度～同19年度）が示されました。

計画の目標

1. 労働災害による死亡者数の減少傾向の堅持。年間1,500人を大きく下回ることを目指し一層の減少を図る。
2. 計画期間中に、労働災害総件数を20%以上減少させる。
3. じん肺、職業がん等の重篤な職業性疾病の減少、酸素欠乏症一酸化炭素中毒等の撲滅を図る。
4. 過重労働による健康障害、職場のストレスによる健康障害等の作業関連疾患の減少を図る。

健康確保の3つの重点

1. 職業性疾病予防対策
   - ＊ じん肺対策については、工学的対策と健康管理対策等による総合的な対策の推進
   - ＊ 「職場における腰痛予防対策指針」の見直しを行う等、腰痛の予防対策の徹底
   - ＊ 騒音・振動対策として、発生機器に騒音・振動レベルの表示の導入
2. 化学物質による健康障害の予防対策
   - ＊ 化学物質の有害性調査および曝露調査の促進、リスク評価等による未規制物質の予防対策推進
   - ＊ 化学物質等安全データシート（MSDS）の普及・定着
   - ＊ 石綿等がん原性を有する物質の予防対策の推進
3. メンタルヘルス対策・過重労働による健康障害の防止対策
   - ＊ 「事業場における労働者の心の健康づくりのための指針」に基づく対応推進
   - ＊ 「職場の自殺防止マニュアル」の周知と、相談体制の確保
   - ＊ 時間外労働の削減や年次有給休暇の取得促進による過重労働の排除

その他、すべての労働者にとって働きやすい職場環境の実現、および「職場における喫煙対策のためのガイドライン」の見直しと周知。

学会等開催予定

第222回関東地方会例会（一泊例会）・第47回見学会
日時：2003年9月19日（金）～20日（土）
会場：つくば国際会議場（エポカルつくば）
見学会：宇宙開発事業団筑波宇宙センター
当番幹事：松崎一葉（筑波大学・社会医学系環境保健）

第13回日本産業衛生学会産業医・産業看護全国協議会
日時：2003年10月17日（金）～18日（土）
会場：アクトシティ浜松
企画運営委員長：鎌田隆
（静岡産業保健推進センター所長）
http://tosh-net.umin.jp/13kyougi/

第8回産業衛生技術部会大会
日時：2003年10月29日（水）
会場：名古屋市中小企業振興会館
実行委員長：土屋真知子
（社団法人静岡県産業環境センター）
http://tosh-net.umin.jp/JSOHtech_8/

第51回日本職業・災害医学会学術大会
日時：2003年11月19日（水）～20日（木）
会場：パシフィコ横浜アネックスホール
会長：阿部薫（労働福祉事業団横浜労災病院長）
http://www.pmet.or.jp/~jomt2003/

第11回日本産業ストレス学会
日時：2003年11月28日（金）～30日（日）
会場：東京慈恵会医科大学
会長：清水英佑
（東京慈恵会医科大学環境保健医学講座教授）

第37回日本産業衛生学会・
中小企業安全衛生研究会・全国集会
日時：2003年12月6日（土）
会場：とちぎ健康の森（宇都宮市）
世話人：武藤孝司
事務局：獨協医大・公衆衛生学・第37回全国集会
TEL 0282-87-2133　FAX 0282-86-2935

第3回関東産業看護部会産業保健研修会
日時：2003年11月（予定）
会長：神保恵子

編集委員名簿

◎伊藤岩美、稲垣弘文、宇佐見隆廣、沖野哲郎、川田智之、川名ヤヨ子、小峰慎吾、○鈴木勇司、諏訪園靖、田中三千代、原美佳子、久内徹、廣尚典、桝元武、宮本俊明、山野優子
◎編集委員長　○事務局

編集後記

イラク戦争の次はSARSと、終息してきたとはいえ海外勤務者健康管理と防疫管理は息つくヒマもありません。まさに企業の危機管理が問われています。このような時でも帰国者はもとより、輸入船の船員や顧客の視察・研修など、海外からの来訪者を完全には止めることができません。つまり発生した場合を想定したクライシスマネジメント（SARS 可能性例発生時の対応マニュアル作成、接触者を特定する方法、搬送者用保護具の検討、など）と、発生させないようにするリスクマネジメント（どの程度の入国前後チェックと観察が必要か、どの程度なら来訪許容範囲か、など）および経営上のリスクマネジメント（来訪拒否した場合の経済損失とリスクの兼ねあいは、従業員への説明は、など）を切り離して考える必要がありました。産業医も通常業務に加えて勉強と会議の毎日で、過労死しないようにするのが精一杯です。（宮本）

2002年2月に厚生労働省より「過労死の総合対策指針」が出されましたが、経済情勢が極めて厳しい今日、各企業も業績と就労体制との狭間の中で苦悩しているのが現状ではないかと思われます。脳・心臓疾患を中心とする過労死と長期間労働（残業時間・睡眠不足）との因果関係の他にも、産業保健に携わっておられる方々は、過労死の背景、とくに精神面での対応も重要なことと思われます。皆様の適切な指導・管理によって、わが国から「過労死」のなくなる日がくることを期待したいと存じます。（久内）